論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　前島志保

本論文「『主婦之友』の時代―近代日本における出版・読書文化の大衆化と婦人雑誌」は、従来、出版史で周縁的な扱いをされてきた 1910 年代から 1930 年代の『主婦之友』（編集長・石川武美、1917-2008 年）を中心とする大衆的婦人雑誌を、同時代の他の定期刊行物と対比しつつ分析し、出版の大衆化における意義を再考するものである。

婦人雑誌に関する学術研究はこれまで全く手薄であっただけに、男性知識人向け雑誌の考察に偏りがちであった雑誌出版史研究の姿勢を見直す壮大な試みでもある。本論文の基盤には、雑誌全巻閲覧という容易でない作業を行う中から、『主婦之友』およびその周辺分野に関する膨大な資料群を発掘し、緻密なかたちで作成された資料集がある。一次資料の徹底的渉猟の中から新事実を多く掘り起こす一方で、文学・文化研究の理論や分析手法を、マスメディアのテクストに適切なかたちで応用することで、比較文化研究の裾野を広げ、表現史としてのメディア研究という、新たな研究の可能性を示すことにも成功している。

本論は全体が三部で構成され、大正・昭和期における雑誌研究の問題点の検討から、『主婦之友』自体のテクスト分析、そして特に「生活（探訪）記事」という用語で前島氏が分類する報道記事の意味する問題へと、次第にフォーカスしていくかたちを取っている。

冒頭の第一部(第 1, 2 章)では、明治後期から 1937 年までの様々な定期刊行物を精査し、あわせて同時代の新聞・雑誌に関する知識人による論説文を総ざらいし、出版物の大衆化現象を再考している。これにより、戦間期の大衆的な婦人雑誌が、日本の出版界の大衆化を率先していたことが明らかになった。特に本論の大きな成果は、大衆的な婦人雑誌が、実は男性をも含む様々な層の人々に読まれていたということが、実証されたことにある。つまり、明治末期以降の雑誌の性差化により出現した婦人雑誌が、「女性向けの雑誌」という体裁は維持しつつも、本来の読者層を超えた広範囲の人々にアピールするようになったのである。

次に第二部（第 3～6 章）は、雑誌『主婦之友』自体を、多様な側面から分析する本論文の要となる部分である。第３、第 4 章においてはまず、この婦人雑誌が大衆化に寄与した要因――人物描写中心の記事構成、娯楽性と視覚性の重視、読者参加の促進、読者・寄稿家・記者の表面上の平等性の演出、誌面の記事・広告と連動した大々的なイベントやメディア・ミックスなどの手法などが明かされる。第 5 章では文学理論を援用しながら、20 世紀前半の婦人雑誌の文章的特徴について考察している。本論での調査の結果、1905 年から 1908 年前後にかけて、文体・記事形式・記事内容・読者層の各点において雑誌の性差化が生じていたことが明らかになったが、ちょうどこの時期以降、口語敬体による実際の口頭談話を再現したかのような文章が、婦人雑誌の記事の特徴とされるようになっていく。ラジオ放送の開始はこの傾向を助長した。その中で、『主婦之友』は、誌面で紹介される「声」の主を、男性を含む広い層の人々に拡大した。読者は口頭談話再現的な臨場感あふれる文

面を通して、そこに取り上げられる人々に親近感を抱くことが出来たのである。

続く第 6 章では、誌面の大衆化のもう一つの柱であった視覚表現の充実化について、特に写真とテクストとの関係を中心に論じている。1921 年に早くも写真部を設置した主婦之友社は、写真館や通信社に頼らず独自の写真画像を大量に使用することで、それまで附録的な存在であった口絵写真欄を画報欄にまで拡大・発展させた。これとともに、本文記事欄にも多数の写真を挿入して、従来の雑誌に特徴的であった口絵欄と本文欄の二部構成、および、一般雑誌と画報誌の区別の双方を脱構築し、「見る」雑誌としての様相を強めていった。大衆婦人雑誌における写真表象の問題については、欧米を含め先行研究が少なく、その意味でも本論は重要な成果を挙げている。

さて最後の第三部（第 7，8 章）では、『主婦之友』の報道的な文章記事（「訪問（探訪）記事」）と報道的な写真記事（「生活（探訪）画報」）における表現と表象を分析する。口頭談話再現的な文体と挿絵・写真など臨場感ある表現の普及、写真の社会的重要性への関心の高まり、他者の日常生活に対する読者の好奇心と、自分の生活を他者に知ってもらいたいという欲求、読者の暮らしぶりを伝え独自の雑誌写真表現を開発したいという制作者側の狙いなど、諸々の要因の交錯点に、これらの探訪記事あるいは探訪画報は成立していたと考えられる。最終章ではその記事内容が、植民地住民にまで及ぶ事実を詳細に追いながら、「想像の共同体」としての「日本」がいかに大衆婦人雑誌において編制されていったのかについても論及している。

審査会ではまず一致して、本論文における資料博捜の意義、綿密な資料集作成に投じられたエネルギー、非常に長大な本文量にもかかわらず大変明快な日本語の叙述に、高い評価が寄せられた。またそこから導き出された観察と分析が極めて説得力のある点も評価される。これまで欧米でさえもまだ実績の少ない大衆婦人雑誌研究に、最初の一歩を拓く研究とも言えよう。

ただし今後これを公にしていく際には、やはりあまりに分量の多い本文の中で、時に見られる反復的説明や、理論的背景のやや過剰な叙述などを削る必要性があるという指摘がなされた。また特に専門的雑誌研究の視点からすると、本論文の分析対象を 1917－1937 年にあえて絞るという根拠をより明確にする必要、雑誌における文字や写真のみならず広告等のより詳細な分析が加えられると望ましい、という意見もあった。一方で石川武美という雑誌主宰者と大正・昭和期のキリスト教的共同体意識についての論及が必要なこと、さらに本論文の結論部分に、「想像の共同体」に帰着するような表象分析を置くことの意義についての質疑もあった。

しかし以上の指摘は、あくまでも今後の進展へのさらなる希望として語られたものであり、本論文の価値を損なうものでないことも確認された。

以上の審査結果を踏まえて、本審査委員会は全会一致で、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと認定する。